

論文

宗教的対話の実践 —マザー・テレサの生き方を通して—

木村晶子*

1. はじめに

1997年9月5日、「マザー・テレサ」の名で知られた一人の修道女が天国へと凱旋した。彼女の葬儀は、カトリック教会で行われただけでなく、インド政府による国葬として執り行われた。それまでの国葬は、1948年のモハマド・ガンディーや1964年のジャワハラル・ネルー首相、1984年のインディラ・ガンディー、1991年の息子ラジブ・ガンディーの歴代首相の葬儀のみであり、外国人のキリスト教徒に対しては異例のものであった。カトリックの一修道女の棺がインドの国旗に覆われ、軍隊に護衛されて行進するという特別の待遇に浴することは、ヒンドゥー教徒の多いインドにおいては想像し難い。しかも、参列者は各国の来賓に加え、数多くの一般民衆も祈りの列に加わり、その数は12,000人を超えた。¹ さらに宗教や言語の違いを超え、葬儀はカトリックの典礼の後、イスラム教徒・シーク教徒・仏教徒が、英語・ラテン語・ヒンディー語・ベンガル語で、それぞれの祈りを捧げたのである。そのほか、マザー・テレサの生涯とその功績は、世界中で讃えられた。たとえば、南アフリカ大統領ネルソン・マンデラは、「全人類にとっての損失。彼女がいなかったことは世界的な平和や公平でおもいやりのある世界の秩序を築く上で、本当に残念である。²」と述べた。また、パキスタン首相ナワズ・シャリフは、「崇高な目的のために生きた、まれにみる独自の存在である。貧しい人や病気の人、障害をもった人の世話を捧げた彼女の生涯は、全人類への献身の最も優れた模範である。³」と、彼女に絶大なる賛辞を与えている。さらに、マレーシア首相マハティール・モハマドは、「愛の奉仕に対する無私の献身の鑑である。彼女がすべての奉仕者と博愛家の模範となりますように。⁴」という祈願をしている。このように、イスラム国の首相からも尊敬され、その功績を讃えられるキリスト教徒の存在はまれに見るものである。

また、イスラム教徒のみならず、多くのヒンズー教徒からも慕われていたことが窺がえる。マザー・テレサの孤児院で育ったフローレンス・モンダル（16歳）は、「私はマザーをととてもとても慕っていました。彼女の考えはととてもすばらしくて、もしすべてのインド人がそれを信じたら、この国は最も偉大な国になっているでしょう。今日はインド国民の母を失ったようなものです。⁵」と述べている。また、ヒンドゥー教

* 藤女子大学人間生活学部人間生活学科助教授

徒たちは、「私はヒンドゥー教徒ですが、そんなことはどうでもよいのです。6」と発言している。

このような状況から推察してみると、マザー・テレサの葬儀において、一時的ではあっても、宗教や民族を超えて、世界がひとつになったと言えるのではないだろうか。特に、イスラムとヒンドゥーの宗教間の争いが絶えないインドにおいて、このような和解と平和の瞬間が実現したということは、特筆すべきことである。

本論においては、マザーを通してさまざまに異なる人々を結び合わせたものは何であったのか、和解と一致の原動力は何であったのかを探してみたい。

2. マザー・テレサがもたらした一致と平和の源

(1) 相違を超えた無私の生き方

マザーが世界中の人々から指示され、尊敬された理由としてまず第一に挙げられることは、彼女の平和と愛についてのメッセージや実践活動が、「文化や宗教などの枠を超えて人を愛すること」であったということであろう。マザーは自分の評判や利益は全く無視して、もっぱらすべての人のために働くことを第一としていたが、この無私の生き方が、彼女に接する人々に感銘を与えたと言える。カンタベリーの大司教V・K・モハンティは葬儀の際、次のように述べた。「マザー・テレサの深められた霊性と徹底的な無私の姿勢が、信仰を事実上ひとつに結びつけたのであろう。このような彼女の資質がダイアナ妃や他の人々を惹き付けたのである。7」

「死を待つ人の家」で亡くなった人に対して、マザーはその人の宗派の仕方で葬儀を行い、その人の希望がかなって魂が救われるようにと祈った。キリスト教の施設で亡くなった場合、キリスト教の葬儀を行うのが普通のことであるが、マザーは、イスラム教徒はイスラム教の儀式で見送り、ヒンズー教徒はヒンズー教の儀式で見送った。彼女は自分の信条を押し付けることなく、一人ひとりの主義・思想をいかに大切にしていたかが、このことから知ることができる。キリスト教を広めるという目的よりも、自分を低くし、すべての人々に仕える「無私」の生き方そのものによって、キリストのメッセージを伝えようとすることに徹したと言えるであろう。

ヒンドゥー教の指導者クリシュナ・クマル・モダニは、「彼女がまだそれほど世界的に有名ではなかった頃、私はヒンドゥー教徒の集まりでマザーに会いました。そのとき強く印象に残っていることは、マザーがひとことも宗教については言わなかったことです。ただ、街の貧しい人々のために何ができるかということだけでした。8」と述べている。つまり、マザー・テレサの活動は、宗教にこだわらず、貧しい人・虐げられている人・苦しんでいる人を助け、人間としての尊厳を回復することにのみ向けられた。この「人を人として大切にし、すべての人に仕える」という姿勢が、インドの人々の心に届いたのであろう。

マザー・テレサは、このように、信仰に対して寛容な精神を持っており、キリスト教のみが唯一絶対の信仰であるとは言わない。決して洗礼を強要することもなく、むしろ、信仰する人がその信仰をよりよく全うすることこそが救いの成就であると説いた。つまり、ある種の多元主義的思想を持っていたと言える。

信仰は神の賜物、でも神様は、ご自分を信じるように強制されたりしません。キリスト教徒、イスラム教徒、ヒンズー教徒、信じる者、信じていない者、皆、同様に、愛の奉仕をする機会を与えられています。誰でも、愛する喜びを分かち合い、神がおられるということに気づく機会を、同様に与えられています。ヒンズー教徒は、よりよいヒンズー教徒に、カトリック教徒は、よりよいカトリック教徒に、イスラム教徒は、よりよいイスラム教徒になるでしょう。⁹

マザーがインドで活動を始めた時代はバチカン公会議以前のことであり、まだこのような寛容な態度は考えられず、すべての人々にキリスト教の洗礼を授けることが宣教師の絶対的使命であると思われていた。それゆえ、このことばからマザーがいかに時代を先取りし、宗教への深い理解を示していたかを知ることができる。バチカン公会議後になって、確かに諸宗教への寛容な態度が公に認められるようになったが、「諸宗教との対話」に真剣に取り組み、他の宗教をキリスト教と対等に考えようとする宣教師やクリスチャンは必ずしも多いとは言えない。対話をしていると言っても、ことばや態度のどこかに「キリスト教優位」が潜んでいることのほうが多い。しかし、マザーはこのような「キリスト教優位」と思われるようなことはけして表さなかった。この徹底した「対話の姿勢」こそが、人々のところに響き、平和の場をもたらしたのであろう。

唯一の神がおられ、その神はすべての人々にとっての神です。ですから、神の前ですべての人々が平等であることが大切です。ヒンドゥー教徒はよりよいヒンドゥー教徒に、イスラム教徒がよりよいイスラム教徒に、カトリック教徒がよりよいカトリック教徒になるように助けなさいと、わたしはいつも言ってきました。わたしたちは、わたしたちの働きが人々にとって模範であるべきだと信じています。¹⁰

ここで、マザーにとって「よりよいカトリック教徒であること」とは、当然、イエス・キリストの模範に従って、人々に奉仕することである。特に、彼女の使命にインスピレーションを与えている聖書のことばは、「マタイ福音書 25 章 35 節-36 節」の「わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたと

きに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。」という一節である。このことばに表されている精神が、彼女を生涯突き動かし続けたのである。したがって、飢えている人・裸の人・苦しんでいる人に仕えることがキリストに仕えることであったのである。

わたしたちは仕事を通して、すべての人のうちにイエスを見るよう、求められています。イエスはわたしたちにおっしゃっています。飢えているのはご自分である、と。裸であるのは、ご自分であると。渴いている人、家のない人、苦しんでいる人はご自分である、と。このことは、わたしたちにとって宝物です。この人たちはイエスなのです。一人ひとり、苦しみの姿をとられたイエスなのです。¹¹

また、次のようにも述べている。

ご聖体のうちに、わたしはキリストをパンの形で見ます。スラムでは、キリストを貧しい人々の心痛む姿の中に見ます。傷ついた体、子どもたち、そして死にかけた人々の中にです。だからこそ、わたしはこの仕事ができるのです。¹²

つまり、カトリックの教えの中心である、「聖体の秘儀」のうちにキリストを見、同時にその中に貧しい人々や苦しむ人々を見ているのである。そして、一人一人の中にイエスを見ることによって、人間の尊厳を見出すのである。

イエスがわたしたちの一人ひとりを愛したように、わたしたちも互いに愛し合うことが求められています。福音書にはっきりと「わたしがあなたたちを愛したように、そして今も愛しているように、愛しなさい。御父がわたしを愛したように、わたしはあなたたちを愛していますと書かれています。御父はイエスを愛していたのに、イエスをわたしたちにくださいました。

わたしたちも、痛みを感じるまで互いに愛し合わなければなりません。¹³

マザー・テレサはこのように聖書の教えを中心とし、キリストに従って生きた。しかし、他方で、他の宗教による救いをも認めているというのは、多元主義ということになり、「すべての人々はキリストによって救われる」というキリスト教の根本とは矛盾が生じてしまうのではないだろうか。なぜ、彼女はこの矛盾を超えて、世界中の人々から理解されたのであろうか。

ここで、もう一度、マザーのことばに耳を傾けよう。

わたしはただ、ヒンズー教やイスラム教、そしてキリスト教の人々のところへ行って、「神様のために、何か美しいことをするチャンスがありますよ」と言うのです。すると人々は、神様のために何か美しいことをしたいので、自分のほうから申し出てくれるのです。¹⁴

インドのようなところで、さまざまな信仰を持つ人々の間で働くことは、わたしたちにとって少しも難しいことではありません。すべての人は神の子です。わたしたちの兄弟、姉妹なのです。わたしたちは、出会う人々に、大きな尊敬をもって接します。……キリスト教徒もキリスト教徒でない人も、皆が愛を実践するように促す、それがわたしたちの役割です。心からの愛の行いは、人々を神に近づけます。人生に神を受け入れた人は、わたしたちの共労働者です。¹⁵

このことばから見えてくるのは、「神」とはマザーにとってあくまでもキリスト教の神であることに変わりはないが、どの信仰者も「無私」の愛の実践を通して、結果的に無意識にキリストを救いの主と認めることとなり、同じ神の子として、みなひとつになることが可能であろうということではないだろうか。キリスト教徒にとっても、イスラム教徒にとっても、ヒンズー教徒や仏教徒にとっても、もっとも根本的なことは抽象的な教義を守るのではなく、愛の実践そのものであり、「教えを生きる」ことである。愛の行為に生きることであって、それを信仰者が徹底的に実行していれば、多元論的な宗教世界の中においても、究極的には同じように救いに与るのではないだろうか。これは、粕谷甲一神父が指摘しているように、カール・ラーナーのいう「匿名のクリスチャン」と同じ意味を指しているように思われる。つまり、「匿名のクリスチャン」とは、「無私に愛に生き、自他共に全くキリスト者として意識していなくとも、神の前に義とされ救われる人物」のことである。¹⁶ 「すべての人々に仕えるために自分を捧げること」は、キリストのメッセージであるとともに、すべての宗教の根底にあるべきものである。徹底的にひとつの宗教において窮めようとするなら、どの宗教においても、「無私」の姿勢が自ずと表れてこよう。このマザーの生き方そのものが、すべての人々を惹きつける要因となったことは明らかである。つまり、マザーのことばや愛の実践に、みな宗教の本質を見たと言ってもよいであろう。

そして、時を同じくしてマザーに呼応するかのようになり、ノーベル平和賞を受賞したダライ・ラマも次のように述べている。

イデオロギー上のくい違いや不運なことに信仰の違いから、こうした問題が生じることもあります。ですから、大切なのは正しい心がまえをもつことで

す。相異なるさまざまな哲学が存在しますが、根本となるべき重要なことは、他者へのあわれみの心であり、慈しみの心であり、他者の苦しみを憂い、利己心を減じようとする心がまえです。こうした慈悲の心こそが、最も尊いものであると私は思っています。そして私たち人類だけが、この慈悲の心を養うことができるのです。思いやりの心を、暖かい心を、暖かい感情を抱くことができれば、私たち自身も幸福を得、満足を得ることができるのです。¹⁷

また、次のようにも述べている。

このような論理と感情にもとづいたあわれみの心は、自分の敵にすらさしのべることができます。(中略) 慈しみの心とあわれみの心を育むことがすべての基本であり、これこそ宗教の主要なメッセージであると私はつねづね語っています。宗教について語る場合、ことさら深く哲学的問題に立ち入る必要はありません。あわれみの心こそ宗教の真髄なのです。あわれみの心を行じ、実践するならば、仏陀その人を重視しようとしまいと、あなたはりっぱな仏教徒です。あるいはキリスト教徒として、愛と慈しみの心を実践しようとするならば、他の哲学的問題を強調する必要はないのです。大切なのは、日々の生活においてこれらを行じることであり、その段階においては、仏教もキリスト教も他の宗教も、たいした違いはありません。いかな宗教も、人類の向上や発展を、慈しみの心や人類愛を強調する点においては同じです。つまり、宗教の真髄という点からみれば、どの宗教もそれほどの違いはないのです。(中略) こうしたよき教えは、日々の生活の中で実践していかなければなりません。神を信じるか、あるいは仏陀を信じるかどうかはたいした問題ではありません。まったき生活を送りさえすればよいのです。¹⁸

このことばは、まさにマザー・テレサのメッセージを言い換えていると言ってもよいであろう。愛と慈しみのところを実践することこそが重要なのであって、宗教の相違は問題にならないはずなのである。もし、マザー・テレサやダライ・ラマのことば通りに生きることができれば、宗教戦争や宗教テロなどということばは、本来存在するはずがない。また、それが宗教の真実の姿であろう。このような生き方こそが、真の平和を生み出し、地球上の人間を和解へと導くことができるのである。これこそがマザーがこの世界にもたらした最も偉大な模範であろう。

(2) ヨハン・ガルトゥングによる平和の理念の実践

第二の要因として考えられるのは、マザー・テレサが平和を構築するために必要な基本理念を実践していたということである。20世紀後半、「平和学」と呼ばれる学問

分野が生まれたが、その創始者であるヨハン・ガルトゥングは、世界の紛争解決のため、平和運動とリーダーとして活躍する一方、平和実現のためのいくつかの基本理念を提示してきた。彼の実践方法とマザー・テレサの活動方法とを比較してみると、一致する点がいくつかある。たとえば、ガルトゥングが紛争解決のために「トランセン
ド法」というのを提示しているが、これは、次の3つの項目を重視する。つまり、

- A 態度における共感
- B 行動における非暴力
- C 対立における創造性

の三つである。¹⁹ Aの「態度における共感」というのは、ことばにおける理解のみならず、心から対話に応ずるといふ態度であり、その当事者がどのような目標をもっているかを聞き出し、相手の気持ちを理解して、心をともしることである。²⁰ Bの「行動における非暴力」は、ガンジーやキング牧師に代表される非暴力運動の促進である。非暴力が必要というのは、暴力回避が一つの目標であると同時に、一つの手段でもあるからである。すなわち、「平和的手段による平和」の実現となるからである。共感と同じように、手段とは平和構築からかけ離れたものではなく、あくまでもその一部である。そして、「非暴力」について考える際、単なる物理的暴力のみならず、「文化的暴力」と呼ばれるものも、充分考慮する必要がある。「文化的暴力」とは、神や祖国の名のもとに殺しを犯すことや、人類のなかの様々な弱者を根絶やしにするために、「弱者切り捨て」的発想で人々を窮乏のうちに死なせることなど、直接的・構造的暴力を正当化・合法化するために役立つ文化のもつ様々な側面である。直接的・構造的暴力が「人間性」に根ざしたものだとは非難する言いがかり的議論も、文化的暴力の一例である。²¹ このような暴力には宗教が関与していることが多いので、宗教対話を考える際、もっとも重要な位置を占める。Cの「対立における創造性」とは、紛争とは非両立性に係わるものであるので、創造性によって相反するものを両立させ、矛盾を超越するのに必要とされるものである。共感と呼ばれる深いレベルでの認識や感情からの理解がここでの必要条件となる。しかし、同時に創造性は、科学者の知識と芸術家の直感をも必要とし、単なる暴力逃避を超えて、矛盾を原動力として活用することを意味する。この場合、芸術の力は人間性を引き出すのにも大いに役立つ。そうした原動力は、かつてなかった積極的平和へと歴史を動かしてゆくものとして大いに期待されるのである。²²

以上が、ガルトゥングの理論であるが、マザー・テレサの行動をこの3つの項目に照らし合わせてみると、まさしくこの理念に適合していることがわかる。Aの「態度における共感」について検討してみると、先に述べた葬儀に参列した人々のことばから、マザーが係わる人々すべてにいかに共感をもって接していたがわかる。そしてその結果、多くの人々がマザーの生き方に共感していることがわかる。実際、大勢のヒンズー教徒が、死を待つ人の家で共労者として働き、貧しい人に仕えるシスターたち

の喜びにあふれた姿に接して、感銘を受けている。

あるヒンズーの男の人が、運び込まれたばかりの人の身体を洗っている、一人の若いシスターの様子を、後ろに立って見ていました。シスターは、その人に気づきませんでした。しばらくして、彼はわたしのところへ来て言いました。「わたしはここに来たとき、虚しく、憎しみにとらわれ、神を信じていませんでした。今、わたしは神に満たされて帰ります。シスターの、愛情をこめてあの人をいたわる手に、わたしは、神の生きた愛を見ました。」²³

このエピソードのように、マザーを始めとするシスターたちの行動は、多くの人々のところに共感を与え、理屈ではなく、直接的に靈的インスピレーションを与えている。これはまさしく「態度における共感」である。

Bの「行動における非暴力」に関しては、言うまでもなく、マザーの行動には暴力的行為は何ひとつみられない。命を尊重することが第一の目的であり、それは同時に平和をも意味する。これはシュヴァイツァーの根本理念にも通じると言えよう。先にも述べたように、すべての人、特に「貧しい人」の「神の子」としての尊厳を忘れてはならないことを、マザーは強調してきた。

わたしたちは日々、社会から拒絶された人々との交わりの中にいます。わたしたちの最初の目的は、彼らの人間としての基本的な成長を助けることです。人間として、同じ神の子としてもつべき尊厳を回復するように努めるのです。このことをするために、わたしたちは、彼らが死にかけている人であるか、それともまだまだ生きられる人なのかを気にすることはありません。²⁴

このことばからわかるように、マザー・テレサは貧しい人々を愛し、支えるという神の呼びかけに応える時、文化や政治などを超越していた。彼女は本質的な尊敬の念を命に対して抱いていた。マザーの人間に対する平等観は、理性で理解するレベルではなく、命と魂のレベルにおける理解であり、それをまさに実践することによってすべての人間の価値を高めたのである。しかし、こうしたマザー・テレサの活動にも批判はあった。彼女の活動は個人の必要に関心が向いており、貧困の原因となり、紛争や暴力を引き起こしている社会構造には立ち向かおうとしていない、という批判である。だが、マザー・テレサにとってそういうことはまた別の次元のことであり、一人ひとりを愛し、思いやるということが、すべての活動の根底になければならないという彼女の確信はゆるぎないものであった。²⁵

また、マザーの生き方において特に強調したい点は、先に懸念された「文化的暴力・差別」がみられないことである。とかくキリスト教の宣教活動においても起こりがち

なことであるが、宣教地の文化を理解しようとする姿勢が足りず、強者が弱者を教育するといった態度が見られ、宣教師と民衆との文化摩擦がしばしば起こってしまう。しかし、マザー・テレサの仕方においてはそのようなことがみられない。むしろ、徹底的に弱者の側に立ち、マザーの方がインドの文化に溶け込んでゆき、自らインド人として生きることを選択した。彼女の生き方の中には、「私たち」対「彼ら」という二元論的構図はけっして見られない。たとえ、私にとって真理ではないかもしれないが、相手にとっては真理なのだと考えて相手を認め、相手の真理を受け入れ、けっして先入観で判断したりはしない。こういう点においても、マザーは意識せずとも徹底的な「非暴力」の実践を示したと言える。

Cの「対立における創造性」という点でも、マザーは独創的なアイデアを編み出している。宗教的ドグマにおいては、どうしても相容れない部分があり、対立が起きてしまうが、マザー・テレサはそれを越えた「創造的实践」を行っている。たとえば、修道服をとっていてもインド風のサリーの形を取り、修道院内部の生活もすべてインド風である。修練女が誓願を立てるときにもインド流の結婚式を取り入れている。決してヨーロッパ的な文化を押し付けず、インド人に合った生活様式や方法を用いている。また、「死を待つ人の家」を最初に開設する際、市役所にかかけあって近くのカーリー寺院を利用し、インドの人々が入りやすい場所を選んでいる。そして、先に述べたように、葬儀の際はそれぞれの希望の宗派に応じて魂の救いを祈っている。いつも、マザーは相手の心をやわらげる礼儀正しさを忘れない。その他、施設のこどもたちがそれぞれの環境に合った生活ができるよう配慮し、教育を受けさせたり、女子にはインドの慣習に従って、花嫁資金としてのダウリーを準備したりもする。このように、マザーは、ヨーロッパ的な先入観を離れて、自由な発想で活動している。

さらに、次のようなエピソードからもマザーのユニークな発想を窺い知ることができる。

マザーはインド航空に、自分をスチュワーデスとして搭乗させてくれないかと、申し出た。食事を配ったりするなどの、簡単な仕事をする代わりに、インド中のシスターたちを訪問するために無料で飛行機に乗れないかというのです。マザーは仕事はもらえませんでした。1973年にインド航空より無料パスを発給されました。²⁶

このようなユーモアと自由さは従来の修道会には見られない。マザー・テレサの型破りとも言える発想や方法が、さまざまな障壁を乗り越える創造性を生み出していると言える。

以上述べてきたように、マザー・テレサの実践法は自然と平和を生み出す方法となっていたのである。そして、現在、ガルトゥングが目指しているものとまさしく一致

しているのである。

3. おわりに

マザーの生き方はインドの人々のみならず、世界中の人々の心を捉え、徐々に周囲の人々をひとつにする力となっていったと言えるであろう。社会を変革しようという意識は持たずに、彼女の熱意と愛の行為が知らず知らずのうちに周囲を変革していったのである。自分の幸せのためではなく、最も貧しい人・社会から疎外されている人のために尽くす、彼女の無私の生き方、主義や信条の相違にかかわらず、すべての人を受け入れようとする心と対話の精神が、結果として自ずと周囲を変化させてゆくこととなっていった。

1981年7月、マザーは和解のための共同体、コリーミーラ（ゲール語で“調和の丘”の意）に招待された。そこで愛とゆるしについて福音のことばで語ったとき、ベティー・ウィリアムズとともにノーベル平和賞を受けたメアリー・ド・コリガンは、次のように書いている。「マザー・テレサは、わたしが福音書を読んだり聞いたりして、すでに知っていること以外、何も言っていません。でも彼女は、すべてを生き生きとしたものにするのです。マザー・テレサの言葉が非常に影響力を持つのは、マザーがその言葉を実際に生きているからだと思います。²⁷」彼女のこのことばにあるように、マザー・テレサは特別なことを言っているわけではないのである。まさに聖書に書かれたとおりのイエスの教えを単純に実行しているだけなのである。しかし、この単純さと実行こそが、最も大切なことであり、継続することが最も難しいことなのである。それを生涯をかけて文字通り実行したことが「偉業」なのであり、すべての人々に直截的に感動を与え、平和と和解を築く源となっているのである。

最後に、マザー・テレサが残した平和への思いを紹介しよう。

沈黙の実りは、祈り
祈りの実りは、信仰
信仰の実りは、愛
愛の実りは、奉仕
奉仕の実りは、平和

「こころの平和のなかで生まれる祈りから、すべてのことは始まるのです。」と彼女は結んでいる。²⁸ わたしたちは、21世紀においても、マザーの生き方を受け継ぎ、マザーの願いをつないでゆきたいものである。

脚注

- 1 葬儀に参列した来賓は次の通りである。
ヒラリー・クリントン／イタリア首相オスカーロ・ルイジ・スカルファーロ
バングラディシュ 首相シェイク・ハシナ／ヨルダン女王 ノル
フィリピン前大統領コラソン・アキノ／イギリス副首相 ジョン・プレスコット
ベルギー女王ファビオラ／ニュージーランド保健大臣ビル・ヒース
スペイン女王ソフィア
- 2 <http://www.ewtn.com./mothertheresa/reflection.html>
- 3 <http://www.canoe.ca/MotherTeresa/sep8-teresa.html>
- 4 <http://www.canoe.ca/MotherTeresa/sep14-prayers.html>
- 5 <http://www.ewtn.com./mothertheresa/reflection.html>
- 6 <http://www.ewtn.com./mothertheresa/reflection.html>
- 7 <http://www.canoe.ca/MotherTeresa/sep8-teresa.html>
- 8 <http://www.ewtn.com./mothertheresa/reflection.html>
- 9 アイリーン・イーガン／キャサリン・イーガン編著、佐倉泉訳、『マザー・テレサの愛と祈り』、ドン・ボスコ社、1996年、p.109
- 10 マザー・テレサ、片柳弘史編、『聖なる者となりなさい』、ドン・ボスコ社、2002年、p.26
- 11 アイリーン・イーガン／キャサリン・イーガン編著、佐倉泉訳、『マザー・テレサの愛と祈り』、p.31
- 12 マザー・テレサ、片柳弘史編、『聖なる者となりなさい』、p.32
- 13 マザー・テレサ、片柳弘史編訳、『愛する子どもたちへ～マザー・テレサの遺言～』、ドン・ボスコ社、2001年、p.32
- 14 アイリーン・イーガン／キャサリン・イーガン編著、佐倉泉訳、『マザー・テレサの愛と祈り』、p.49
- 15 アイリーン・イーガン／キャサリン・イーガン編著、佐倉泉訳、『マザー・テレサの愛と祈り』、p.57
- 16 粕谷甲一 『十字架上の仏陀～バーミアン石仏への献花～』、新世社、2002年、p.157
カトリック教会は、その絶対性を主張せず、諸宗教の一つであるという相対的な立場を認めた上で、「キリストによる救いの唯一性」ということをはっきりと主張しているが、宗教学者ジョン・ヒックは、このような考え方を「キリスト教包括主義」と名付けている。しかし、ヒックの解釈によれば、「包括」という意味を「同じ平面上で一つが他を“包む”」という意味で捉えており、この解釈をマザー・テレサのことばにあてはめると、「絶対性」と「共存」という矛盾が生じてしまう。しかし、もし、粕谷神父の指摘するように、カール・ラーナーが示す、別次元の根源的（超越論的）“包括”を意味するならば可能となろう。ラーナーの弟子であった粕谷甲一神父によれば、「このように根源を深めることによって両者が互いに含みあうことは可能」であって、そのような含蓄性は、「根源的含蓄」と呼べる。それは「同じ次元で一つが他を“包括”するという含

蓄」、あるいは、「観念的な言葉によって相互の共通性を含みとして交えていくという包括方法」ではなく、その根源を生きることの中で出会うという生き方を指すのである。それはあたかもキリスト教徒が優越感をもって他の教徒を上から見下ろすというような、ヒックの意味での「キリスト教包括主義」ではなく、ラーナーの言う超自然的実存規定に通じ、別次元の含蓄方法である。このことをカール・ラーナーは根源的な「含蓄的信仰」と呼び、その受け皿はすべての人の精神の宿る聖霊の場—超自然的実存規定—であるとする。これは、ラーナーのいう「匿名のキリスト者」の基盤であり、プロテスタント神学者の滝沢克己が、「神」と「人間の自己」との「第一義の接触」と呼んだものと同じであり、他宗教とキリスト教の「共通根拠」となる場なのである。マザー・テレサはまさしくこのラーナーが指す、「根源的含蓄」によるキリスト教包括主義によって、すべての人を「神の子」と呼んだのであろう。しかし、彼女自身は全くこのような神学的意味は意識することなく、直観的に聖書とキリスト自身を通じてこの意味を悟っていたのであろう。マザー・テレサは明確に神学的に説明しているわけではない。しかし、その内容はまさしくこの「匿名のクリスチャン」に通じるものであり、根源的含蓄と呼べるものである。マザー・テレサはこの根源の上に立っているが故に、「一線横並び」の多元主義ではなく、それを超えて「キリストの唯一性」に通じるのである。

17 ダライ・ラマ、三浦順子訳、『愛と非暴力』、春秋社、1996年、pp.37-38

18 ダライ・ラマ、三浦順子訳、『愛と非暴力』、pp.49-42

19 ヨハン・ガルトゥング・藤田明史編著 『ガルトゥング平和学入門』、法律文化社、2003年、pp. 21-22

20 ヨハン・ガルトゥング・藤田明史編著 『ガルトゥング平和学入門』、p.21

21 ヨハン・ガルトゥング・藤田明史編著 『ガルトゥング平和学入門』、p.57

22 同上。

23 アイリーン・イーガン／キャサリン・イーガン、『マザー・テレサの愛と祈り』、p.72

24 マザー・テレサ、片柳弘史編、『聖なる者となりなさい』、p.36

25 『マザー・テレサの愛と祈り』、p.14

26 『マザー・テレサの愛と祈り』、p.86

27 『マザー・テレサの愛と祈り』、p.95

28 『愛する子どもたちへ ～マザー・テレサの遺言～』、p.60

マザー・テレサ年譜

- ・ 1910年8月26日、マケドニアのスコピエにて誕生。
本名、アグネス・ゴンジャ。
- ・ 1928年11月29日、ロレットの聖母修道会に入会。その後インドのカルカッタへ派遣され、セント・メリーズ・ハイスクールで20年間教鞭をとる。
- ・ 1946年9月10日、年の黙想のためダージリンに赴く汽車の中で、「貧しい人々のなかの最も貧しい使徒に仕えなさい」という内なる声を聴く。
- ・ 1948年4月12日、修道会を離れ、スラムに移り住む。
- ・ 1950年、「神の愛の宣教者会」を設立。カルカッタ大司教の認可を受ける。
- ・ 1965年2月1日、「神の愛の宣教者会」教皇の認可を受ける。
- ・ 1979年、ノーベル平和賞受賞。
- ・ 1981年、初来日。東京に「神の愛の宣教者会」開かれる。
- ・ 1997年9月5日、帰天。享年87歳。
- ・ 2003年10月19日、ローマにて列福される。